

## 「平和の俳句 23」

2016年11月03日

「東京新聞」の「平和の俳句」から、明日の世界を築く10代の若者たちの句を紹介したい。「きみの声多くの人をすくう武器 中村圭吾（14歳）」<金子兜太 中学三年の作者は世の中にある「いじめ」を気にし、それを抑え込んでくれる人の出現を期待しているのだ。その念（おも）いを俳句に。>黙っていることは「いじめ」を黙認することになる。民主主義は声をあげ、集まった声に添って社会を形成するシステムである。人間否定の声に従った恐怖の時代もあった。人を「すくう」武器になる声は何であるかを求め、その声を集積していきたいものである。

「世界から国境消える日やってくる 北野純希（じゅんき）（14歳）」<金子兜太 この中学生は、世界百九十六カ国が一つになる日を期待している。そうなれば争わない、平和が生まれると言う。見事な期待だ。>壮大な夢である。皆で待望したい。新自由主義の名の下、グローバリゼーションを謳歌し、人、物、金は世界を走り回っている。一方、国益主義が闊歩し、戦いは過熱しているのが現状である。国家主権の制限が、これからの世界に求められる。

「八月や振り出しに戻るあの光 吉田淳輝（じゅんき）（15歳）」<いとうせいこう 原子爆弾投下と見ても、空襲の火と見ても、日の光と見てもよし。><金子兜太 戦後七十一年、大敗の傷痕に光を探る。その光を見誤るな。>いとう氏は、「あの光」は原爆、空襲、日の光と見てもよしと言う。いづれにしても、8月の敗戦の振り出しから、新しい平和の光を見出していくのである。だから「今日こそが昨日の死者の望む明日 神原（かんばら）駿太（しゅんた）（14歳）」と詠い、昨日の死者を明日の望みにつなげていく今日があると詠っている。若者たちのセンスは素晴らしい。

「平和の俳句 戦後71年」の「記者の『一句』」から。「よかよかと母のくちぐせすくわれる 下村眸（73歳）」長崎県生まれの母親は「よかよか」が口癖で、下村氏はこの言葉によって救われてきたと詠う。漫画『天才バカボン』のお父さんは「これでいいのだ」が口癖であった。辛く悲しく、行き詰った時「これで、よか」と言われたら、心に大きな安心を得る。私は、主イエスの十字架と復活に「よし」という「是認宣言」を聞き、生きて行こうとする救いが与えられた。

「人間は誰でもみんな障害者 松崎春信（69歳）」障害者は殺した方が本人と世の中のためになると考え、実際に殺した戦慄する事件があった。老人ホームの階上から、入居者を投げ下ろしたり、点滴に毒物を入れたり、社会的弱者を殺害する事件が多発している。松崎氏が詠んでいるように、人は皆、障害者なのである。障害を持つ自分を知って、共に生きる平和を目指したい。

「終戦それとも敗戦孫がきく 岡隆二（71歳）」戦時中、敗退を転進と言い、全滅を玉碎と言い換えて、ごまかした。敗戦も終戦と言って、敗戦を認めない言葉とした。私は「敗戦」という言葉を使ってきた。ところが、経済同友会の終身幹事をされた、護憲派の稀有な経済人の品川正治氏は下記のように語っていた。敗戦後、帰国する船の中で、日本国憲法の草案を読んだ時、感激して涙が止まらなかった。品川氏は「もう戦争は終わった」という意味で「終戦」の言葉を使うことにしたという。世界から全ての戦争が終わる「終戦」の日が来たら、どんなに良いだろうか。戦争を放棄した九条を世界に発信すべしである。

6歳と8歳の子どもの句を二句。「あのせみはPeace Peaceとないてるね 野中いろ芭（6歳）」「せんそうのない世界まであと一歩 宮はるひ（8歳）」子どもの心に平和に対する意識、感性を養う家庭なのであろう。